

幼稚園

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

平成9年度

教育研究員名簿

主題	分科会主題	地区名	幼稚園名	氏名
幼児の充実した生活と環境の構成	第1分科会 先生や友達と触れ合いながら 幼児が生活に必要な習慣や態度を 身に付けるための環境の構成について	中央 港 新宿 文京 江東 品川 目黒 渋谷 武蔵野	豊海 芝浦 戸塚第二 小日向台町 第四砂町 平塚 げっこうはら 本町 境	山本三起子 池之上順子 ○福田恵子 塚本美起子 後藤葉子 鈴木修代 田村秀子 ◎宮城ゆかり 松井洋子
	第2分科会 友達と喜びや悲しみを共感し、 思いやりをもって共に生活する楽しさを 味わうようになるための環境の構成と 援助の在り方	新宿 台東 墨田 江東 大田 世田谷 中野 北	戸塚第三 竹町 更正 香取 大森第四 多聞 ひがしなかの うめのき	中尾恵子 ○太田悦子 稲原孝子 朝野美津子 ◎田中伊津子 藤本多美子 日高文子 小針静江

◎世話人

○副世話人

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事

岡上直子

目 次

研究に当たって	2
<第1分科会>	
先生や友達と触れ合いながら、 幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けるための環境の構成について	
I 主題設定の理由	3
II 研究方法	3
III 研究内容	
1 主題のとらえ方	4
2 幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けていく過程について	4
(1) 必要感と要因について	4
(2) 環境の構成について	4
3 実践事例	
(1) おやつを食べる楽しさを感じとったことで身の回りの始末を始めた事例	6
(2) 教師と一緒に弁当の後始末の仕方を覚え、してみようとする事例	8
(3) 遊びの満足感が味わえたことが片付けの行動につながった事例	10
IV まとめと今後の課題	
1 幼児が必要感を感じて行動するのはどのような時か	12
2 生活に必要な習慣が身に付くためには、どのような経験が大切か	12
3 環境の構成と援助の在り方	13
<第2分科会>	
友達と喜びや悲しみを共感し、思いやりをもって 共に生活する楽しさを味わうようになるための環境の構成と援助の在り方	
I 主題設定の理由	14
II 研究方法	14
III 研究内容	
1 主題のとらえ方	14
(1) 幼児にとっての思いやりとは・・・	14
(2) 共に生活する楽しさを味わうとは・・・	15
2 思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになる過程について	15
思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようにするための環境の構成と援助	16
3 実践事例	
事例1 思い通りにならないことや相手の思いに気付くなどの感情を体験した事例…	18
事例2 自分の思いを実現しながら友達と共感して遊んだ事例	20
事例3 友達が思いを押し量り、 思いに添ってくれたことで気分転換ができた事例	21
IV まとめと今後の課題	24

研究に当たって

共通研究主題

「幼児の充実した生活と環境の構成」

幼児期は遊びを通して自分の力で物事を行う充実感を味わったり、自己の存在感を感じたりしながら人間形成の基盤をつくっていく。幼稚園生活において幼児は、教師との信頼関係を基盤としながら、自ら環境に働きかけ様々な遊びを生み出し生活を豊かにしている。

そこで、教師が一人一人の幼児への愛情ある共感的理解を深めるとともに、幼児が個性を発揮し、充実した生活を展開していけるよう、幼児の側に立った教育を創造していくことが大切である。とりわけ、環境の構成の在り方が幼児の生活の充実に大きく影響していることを重視し、教育内容・方法を見直すとともに、指導に対しての評価を十分にを行い、それを次の指導に生かしていけるように努めることが重要である。

こうした考えのもとに、今年度は、共通研究主題を「幼児の充実した生活と環境の構成」として研究を進めることにした。研究に当たっては、2分科会を構成し、各分科会における研究主題及び、研究内容を次のように押さえた。

第1分科会

「先生や友達と触れ合いながら、

幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けるための環境の構成について」

幼児が充実した生活をしていくためには、幼稚園生活に安定し、楽しさを感じとりながら生活に必要な習慣や態度を身に付け、自分なりに考えたり判断したりして行動できるようにすることが必要であると考えた。そのためには、教師や友達と触れ合う中で幼児が自ら必要感をもって行動し、自分でできた喜びや自信をもつ体験の積み重ねが大切であると考えた。そこで、幼児が生活の中で必要感をもって行動するための要因や過程を明らかにしながら、教師の援助や環境の構成の在り方を探ることにした。

第2分科会

「友達と喜びや悲しみを共感し、思いやりをもって

共に生活する楽しさを味わうようになるための環境の構成と援助の在り方」

幼児は、他の幼児と共に生活を展開する中で、いろいろな感情を味わいながら、次第に自分の気持ちや相手の気持ちに気付くようになり、やがて、思いやりの気持ちをもったり、共に生活する楽しさを味わったりするようになる。このような育ちのためには、幼稚園生活において他の幼児と十分かわりながら生活する経験が大切である。幼児は、どのような経験の積み重ねによって、思いやりをもって、共に生活する楽しさを味わうようになるのか、その過程と要因を明らかにし、環境の構成や援助の在り方を探ることにした。

先生や友達と触れ合いながら、幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けるための環境の構成について

I 主題設定の理由

幼児は、自分の事を自分でしたり、人とのかかわりの楽しさや葛藤を体験したりしながら、生活に必要な習慣や態度を身に付けていく。そのことが幼児の遊びや生活を充実させ、幼児の自己実現へと導き、「生きる力」の基礎になると考える。しかし、幼児の姿を見てみると衣服の着脱や食事の準備を自分でしょうという気持ちがなかなかもてなかったり、あいさつはできるが片付けや集団でのルールが守れなかったりするなど、生活に必要な習慣や態度が身に付いていない幼児が多い。そこで幼稚園においては、先生や友達と触れ合いながら幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けるようにすることが大切であると考え。

依存から自立へと向かう幼児期において、生活に必要な習慣や態度を身に付けるということは、単に行動様式を繰り返し行い習慣化させることではなく、幼稚園の友達や先生との触れ合いの中で、自らの必要感をもって身に付けていくことが大切にされなくてはならないと考える。そして、幼児が先生や友達との触れ合いの中で、先生の愛情や自分の存在感を感じるとともに友達のよさに気付くなど、幼児が発達に必要な体験を積み重ねていけるようにすることが幼児期からの「心の教育」につながると考える。

そこで、幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付け、充実した生活を実現させていく環境の構成についての手立てを探っていきたいと考え、標記の主題を設定した。

II 研究方法

研究のねらい

先生や友達との生活の中で、幼児が必要感をもって生活に必要な習慣や態度を身に付けていくための環境の構成の在り方を探る。

研究の方法

○先行研究から幼児の生活に必要な生活習慣について共通理解する。
○研究保育や実践記録をもとに分析・考察し、幼児が生活に必要な習慣を身に付けていく過程をとらえるとともに、環境について探る。

<分析・考察の視点>

- ①幼児はどのような時に必要感を感じているのか。
- ②幼児は何を体験しているのか。
- ③環境の構成はどうであったか。

Ⅲ 研究内容

1 主題のとらえ方

生活に必要な習慣や態度とは、幼稚園において幼児が健康で安全な生活を送るための基盤であり、生活や遊びを楽しく充実したものにする基盤となるものである。また、友達とかかわる力や共同の物の使い方など、人と協調して生活していく上で必要になってくる習慣や態度である。

本研究では、幼児期における生活に必要な習慣や態度を次のようにとらえた。

○基本的生活習慣に関するもの —— 個が身に付ける習慣・生理的なもの ——

・排泄 ・食事 ・清潔 ・あいさつ ・着脱 ・片付け

○社会生活に関するもの —— 集団の中で個が身に付ける習慣・社会的なもの ——

・自分の考えややりたいことが言える ・人の話を聞ける ・相手の立場に気付く
・言っではいけないことやしてはいけないことに気付く ・がまんしたり譲ったりする
・気持ちをコントロールしたり切り換えたりする ・物を大切にし、皆で使う
・きまりの大切さに気付き、守る

○生命保全に関するもの

・危険な場所が分かる ・危険な遊び方をしない ・災害時の行動の仕方を知る
・安全に気を付けて行動しようとする

2 幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けていく過程について

(1) 必要感と要因について

幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けていくためには、保護者や教師との信頼の中で安定することが基盤になる。その上で、幼児が自ら環境に働きかけ、様々な体験をする中で片付けや手をきれいに洗うことなどの必要感を感じて行動をおこすと考えた。また、必要感を感じるには、様々な要因があると考えた。

必要感を感じる要因には例えば、汚れたから手を洗うというような清潔に対する感覚などの「直接的要因」と、遊びの楽しさや満足感を味わうことで目的意識がもてるというような直接的要因を支えるものとしての「間接的要因」があると考えた。このような要因がからみあって幼児は必要感を感じ、幼児の自覚や責任感につながり行動をおこす。その積み重ねによって生活に必要な習慣や態度が身に付くと考えた。

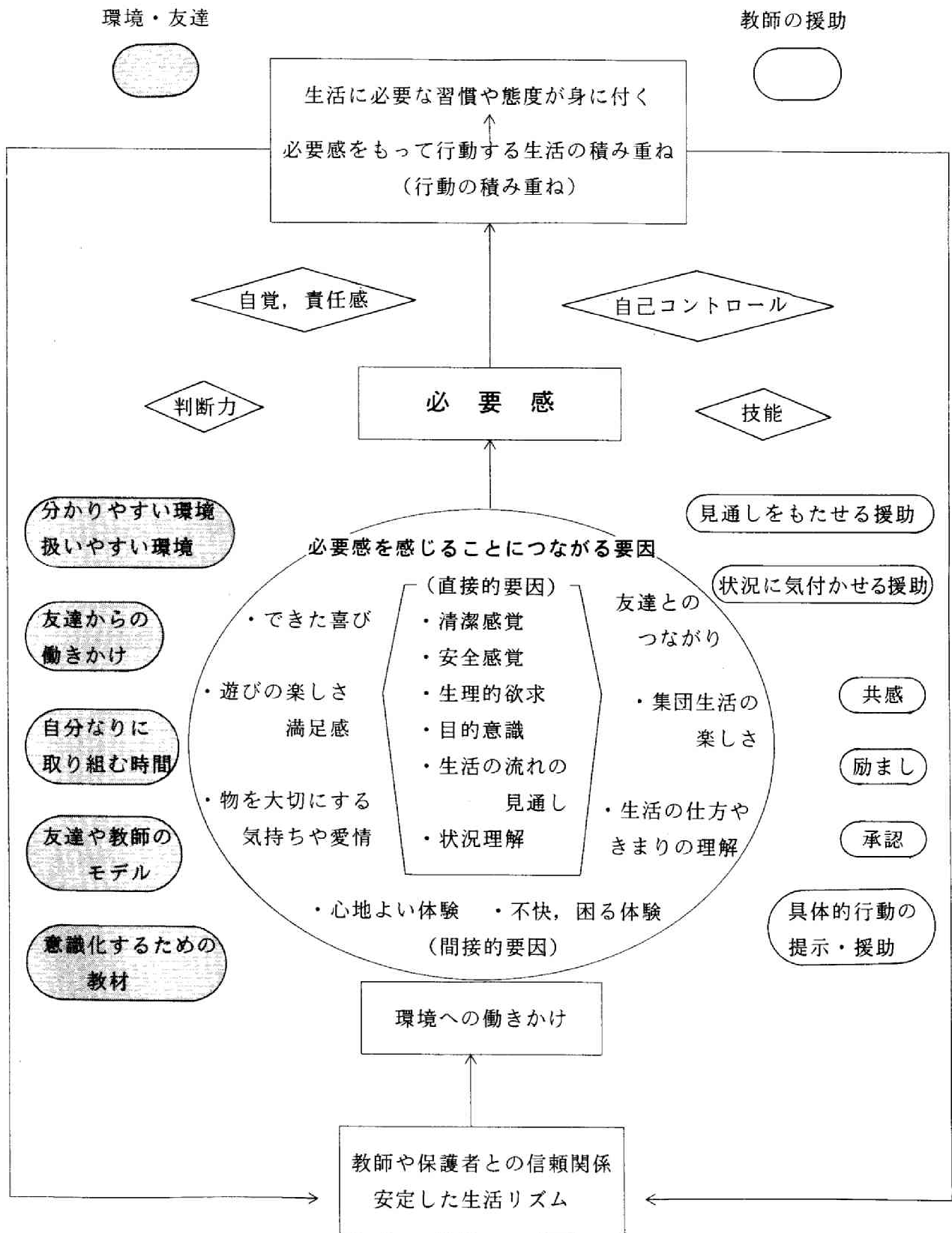
(2) 環境の構成について

幼児が必要感をもって生活に必要な習慣や態度を身に付けていくためには、園内の物的環境が分かりやすくなっていたり、友達や教師をモデルにしたりすることができるような環境が大切である。また、教師の言葉かけや、具体的な行動の援助等、幼児の必要感を感じることや行動化に大きく影響すると考えた。

上記のような要因や環境の構成と幼児の行動化との関連を図に示すと、右頁の図1「幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けていく過程」のようになる。

図 1

幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けていく過程



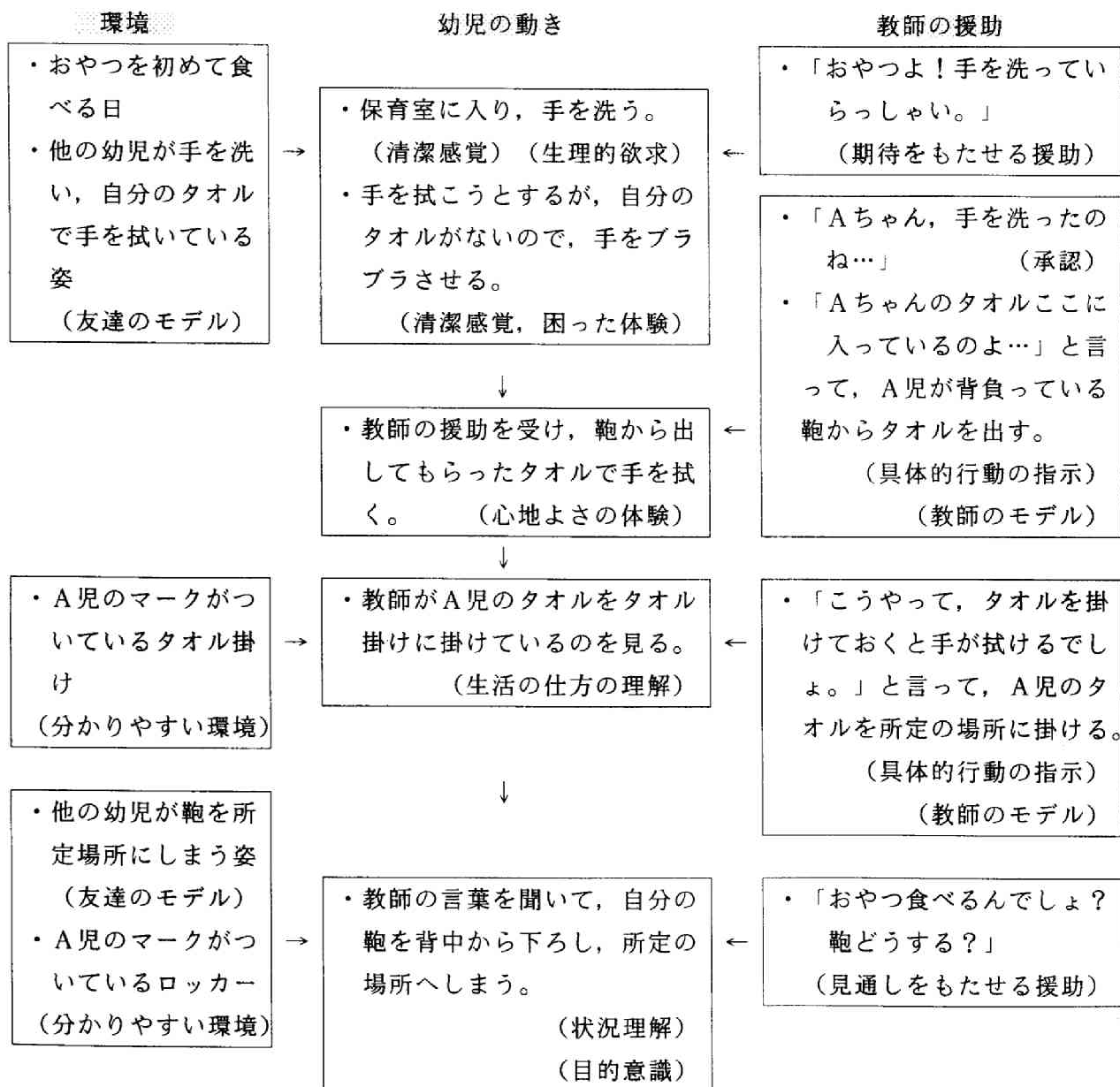
3 実践事例

生活に必要な習慣や態度が身に付く過程において、幼児は何を体験し、どのような時に必要感を感じるのか、また、教師の援助や環境はどうあればよいか、事例を通して探った。

(1) おやつを食べる楽しさを感じとったことで身の回りの始末を始めた事例

(3年保育3歳児 4月)

A児のプロフィール：入園当初より表情に緊張感が見られ、連日、鞆を離さず背負ったまま生活している。教師が話かけても返事がかえってこないことが多い。鞆を下ろすように繰り返し促してきたが、下ろそうとしない。



<考察>

① 幼児はどのような時に必要感を感じているのか

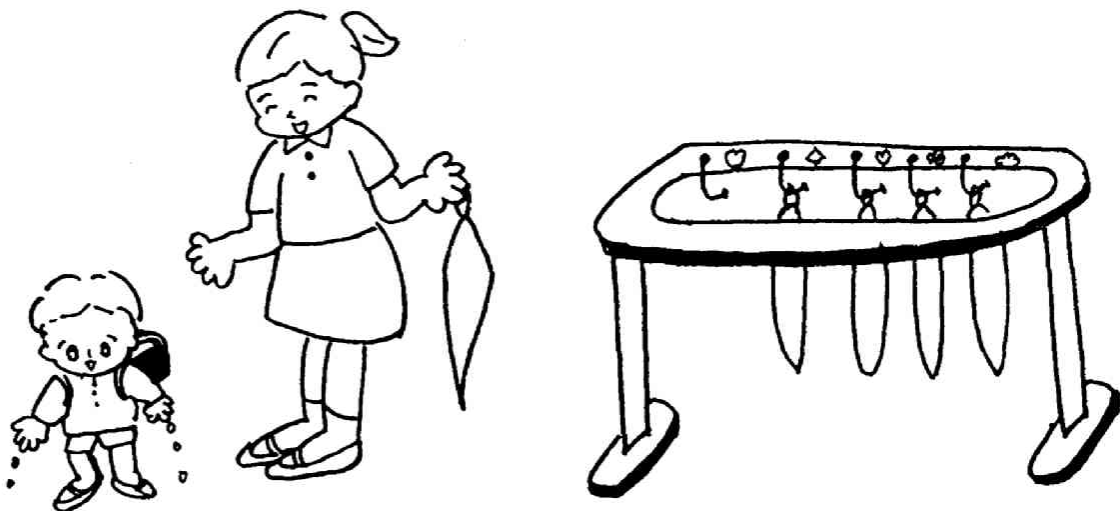
- ・家庭でおやつを食べる前に手を洗う習慣が身に付いているようである。しかし、家庭では、洗面所には、すでにタオルが用意されているなど準備された環境の中で手を拭いていたので、手を拭くタオルを自分で用意する必要感を感じていない。他の幼児が使っているタオルは自分が使うタオルではないことは感じていて、濡れた手の始末に困っている。
- ・おやつを食べるといふ楽しさから心を開き、友達と同じように鞆を下ろして食べた方がよいと感じ、鞆をロッカーにしまう必要感を感じ始めている。

② 幼児は何を経験しているのか

- ・生活に必要な身の回りの準備の仕方に気付き始めている。
(手を拭くためのタオルを自分で準備する)
- ・生活に必要な持ち物の始末の仕方に気付き始めている。
(タオルや鞆を所定の場所に置く)

③ 教師の援助や環境の構成について

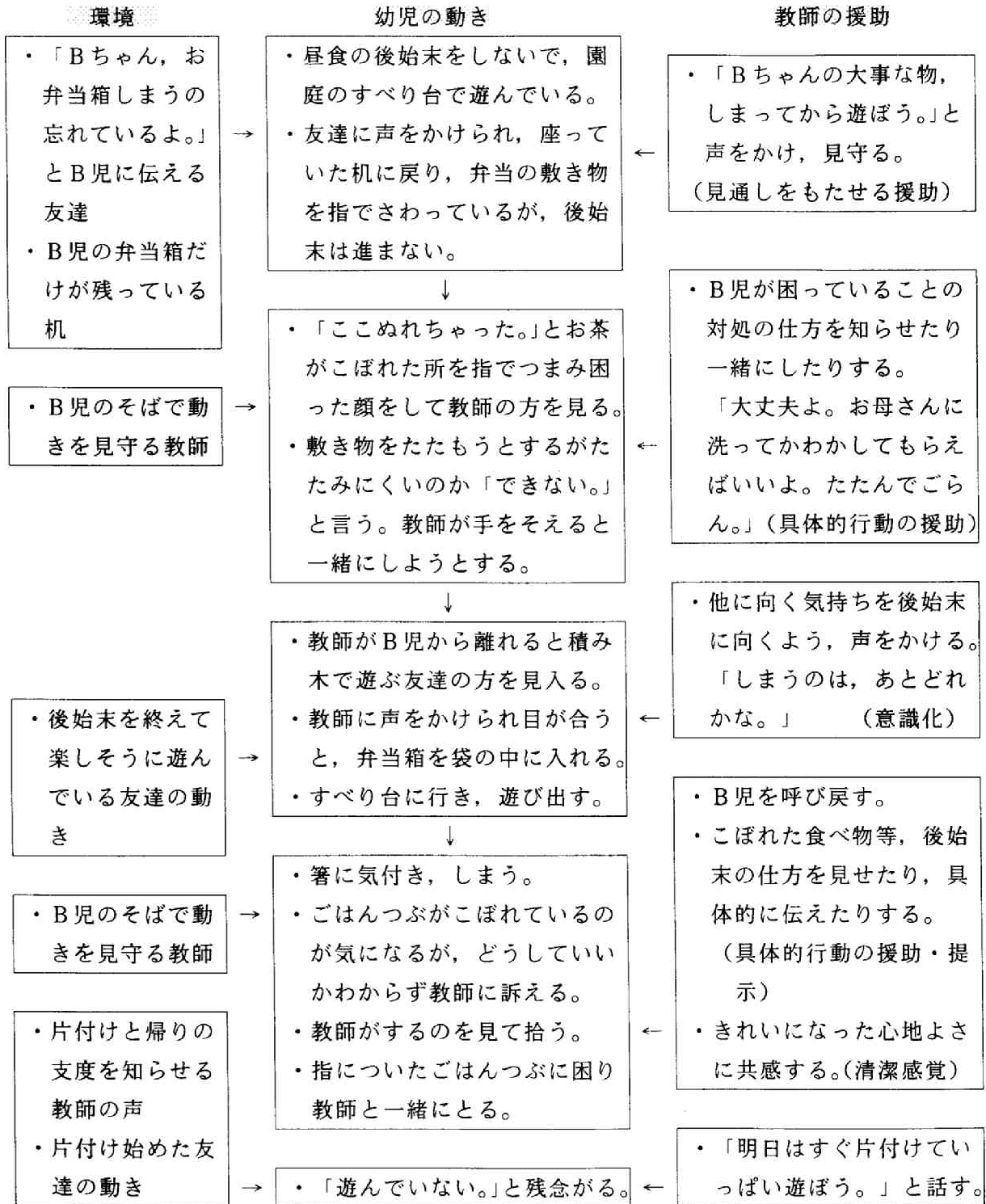
- ・おやつを食べるといふ楽しい雰囲気が、教師の言葉を聞いたり、友達の手を洗う姿を見たりして、自分で手を洗う行動につながっている。このように緊張を取り除き、安心して生活できるような雰囲気をつくり、生活の仕方を工夫していく。
- ・3歳児でも分かりやすいマークを活用することで自分の場所を認識しやすくし、自分で鞆を置く行動につながっている。このような環境を工夫するとともに、今後は身の回りの始末を教師と一緒にしたり、そのモデル(教師、友達)を見せたりして始末の仕方を知らせ、自分からしようとする気持ちをもてるように援助していくことが大切である。
また、自分なりに身の回りの始末をしようとする気持ちが高まってきている姿を保護者に伝え、保護者との連携を図っていく。



(2) 教師と一緒に弁当の後始末の仕方を覚え、してみようとする事例

(2年保育4歳児 7月)

B児のプロフィール：入園当初より、好きな遊びにはマイペースでじっくり取り組むが、園服の着脱、持ち物の始末など生活の場面では、できないと感じると不安になり、「できない」と泣いたり、訴えたりすることが多い。



<考察>

① 幼児はどのような時に必要感を感じているのか

- ・友達や教師の言葉を聞いたり、自分の弁当箱が残っている様子を見たりしたことから状況を感じとり、後始末をすることに気付いて始めようとする。
- ・自分で後始末をするという集団での生活の仕方は分かり、しようとする。しかし、ぬれた敷き物やこぼれているごはんなどの始末の仕方に慣れていないために、自分では進められないでいる。また、遊びたい欲求や友達の遊びへの関心から、後始末の意識がとぎれ、行動化できないでいる。
- ・教師がそばにいることや、一緒に動いてくれることが行動化につながっている。

② 幼児は何を経験しているのか

- ・後始末の仕方に戸惑い、どうしてよいかわからない気持ちを感じている。
- ・できないことを教師と一緒にしてもらい、安心感を感じている。
- ・教師の言葉や動きから、後始末の仕方に気付き、自分でもしてみようとしている。

③ 教師の援助と環境の構成について

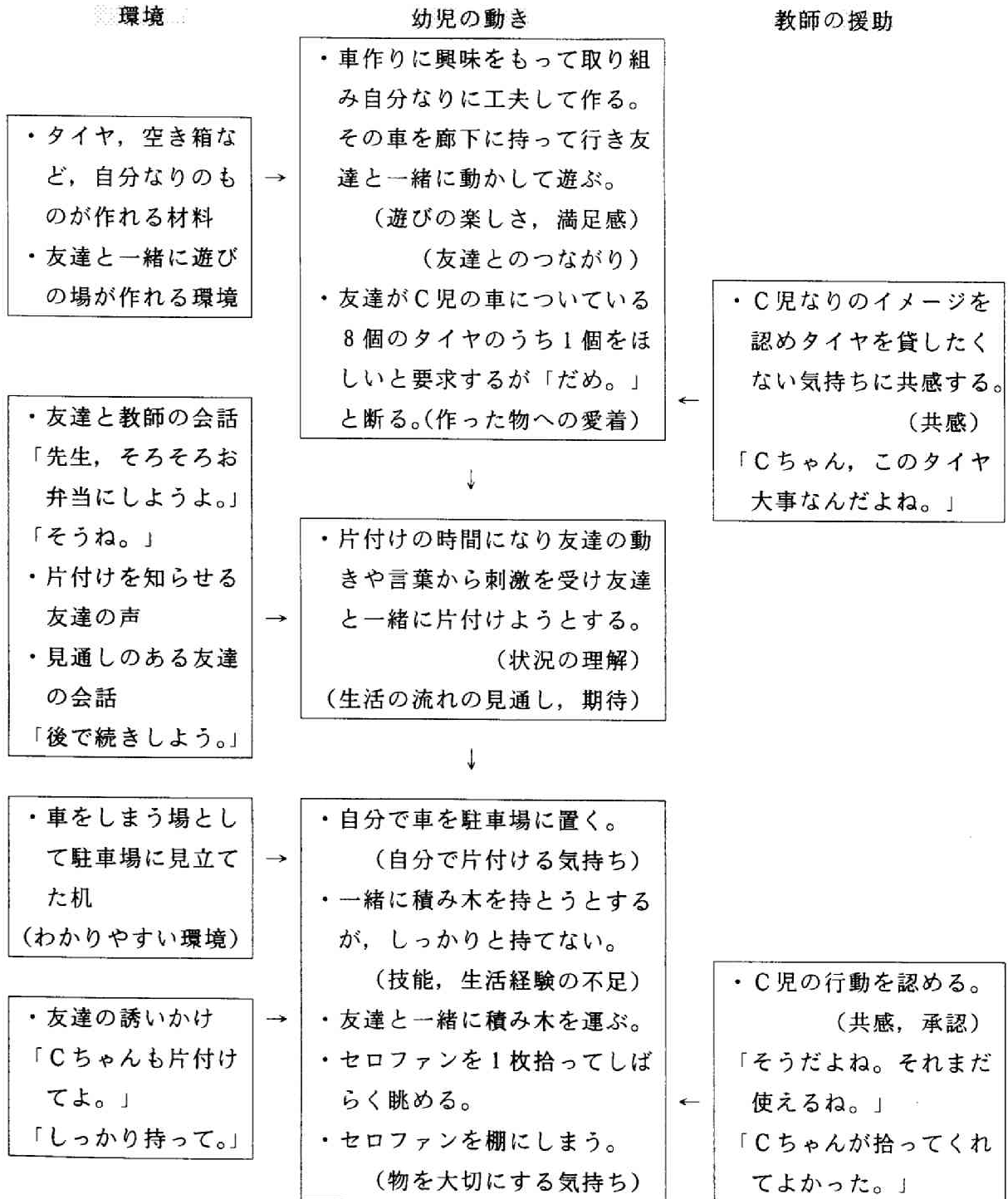
- ・教師がそばにいて、できない不安感を取り除くような対応をしたり、モデルとなる動きをすることが支えとなり、してみようという気持ちが持続し行動につながっている。そこで教師とのつながりの中で安心してじっくり取り組めるような関係や雰囲気心を心がけていく。その中で分かりやすい具体的な援助をし、自分で身の回りのことに対処していく体験を積み重ねられるようにしていく。また、家庭にも身の回りのことを自分ですることの大切さを伝え、経験を増やしていけるよう、保護者との連携を密にしていく。
- ・友達からの言葉を聞き入れたり、遊んでいる友達の動きに関心をもって見たりしているので、生活行動の面でも、周りの友達がしていることに関心をもてるよう働きかけ、自分から気付いて取り組むきっかけとなるようにする。また、周りの友達と一緒に後始末をする状況をつくり、始末を終えて一緒に遊び出せる喜びや期待につながるようにしていく。
- ・片付けのタイミングがずれたことで遊びに気持ちが移り、集中できないでいる。食べ終えた満足感から気持ち良く後始末に入れるようにタイミングを逃さず指導したり、遊びたい気持ちを満たせるよう時間的なゆとりをもって指導したりするなど、生活の流れの見通しをもって行動していけるようにする。
- ・自分でしようとする気持ちの芽生えを大切にし、できた喜びに共感しながら自分でできるという思いや、自分なりにしてみようという意欲につながるようにしていく。



(3) 遊びの満足感を味わえたことが片付けの行動につながった事例

(2年保育5歳児 7月)

C児のプロフィール：登園が遅れがちで園生活のリズムにのれず、遊びこめないことがある。また、友達と遊びたい気持ちはあるがうまくかかわれず、満足感を味わえないこともある。片付けの時に自分から片付けないことが多い。



<考察>

① 幼児はどのような時に必要感を感じているのか

- ・一緒に遊んでいた友達の言葉や動きから、友達と同じように片付けたい気持ちをもったり、昼食後の遊びへの期待や生活の見通しをもったりしたことで、片付けの行動に移ることができた。これは遊びの満足感を味わえたことが支えとなっていると考えられる。しかし、自覚や責任感を感じられず、片付けの技能が獲得されていないため、片付けの行動は少ししか見られない。

② 幼児は何を経験しているのか

- ・友達と遊んだ満足感を味わっている。
- ・友達と一緒に片付ける心地よさを味わっている。
- ・友達の動きに合わせて同じ動きをしようとしている。
- ・友達や教師の動きや言葉から、片付けの必要感を感じたり片付け方を学んだりしている。

③ 教師の援助と環境の構成について

- ・駐車場など片付け方が分かりやすい環境があることが片付ける動きにつながっている。このように分かりやすい環境を幼児と一緒に工夫してつくっていき、次の日の遊びに期待がもてるようにしていくことが大切である。
- ・片付けを促してくれたり、モデルになる友達がいたことが自分でしようとする気持ちにつながった。このような体験を積み重ね、自分たちの遊んだ場は自分たちで最後まで片付けるという自覚をもつように援助していきたい。そのためには、C児にとって片付けのモデルとなる友達と一緒に遊んだり、片付けたりできるような状況をつくることが有効であると考えられる。
- ・教師がセロファンを拾ったC児の行動を認めたことで、C児は自分でどのように片付ければよいかを考えて行動している。教師は幼児の行動をよく見て、共感しながら認めたり励ましたりし、自信をもって行動できるようにしていく。
いろいろな遊具や素材の片付け方がわかり、自分で判断して動いたり自信をもって扱えるようになるためには、このような機会をとらえ、遊具や用具の扱いに気付かせたり、確認したり、具体的に繰り返し教えたりする必要がある。
- ・遊びの満足感が支えになり片付けの行動につながっているため、友達と一緒に遊んだ満足感が味わえるように、時間や場を保障したり、友達と楽しく遊べるような遊びの提示をしたり、遊具や素材を用意したりする。

IV まとめと今後の課題

幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けていくための、環境の構成や教師の援助の在り方に視点を当て、研究を進めてきた。その中で次のようなことが分かった。

1 幼児が必要感を感じて行動するのはどのような時か

幼児は、家庭での生活の中で、親に教えてもらったり手伝ってもらったりして行動したことを基盤にしながら、生活に必要な様々な習慣や態度を身に付け、自ら行動しようとするようになる。しかし、家庭でできていたことでも、集団の中では行動できないこともある。幼児は、園生活に安定し友達とのかかわりや心身の発達と関連しながら、次のような時に必要感を感じていくことが分かった。

入園当初の幼児は、家庭と幼稚園で生活の仕方や設備・遊具等の環境が違い、行動の仕方について戸惑うことも多い。しかし、教師と一緒にやったらできた、気持ちよかったということを感じる体験を積み重ねていくことが、「幼稚園ではこうするのだな。」という気付きにつながり、「またやってみよう。」「今度は自分でやってみよう。」という意欲をもち、やがて必要感につながっていくと思われる。

また、園生活に安定し、友達とのかかわりや遊びの楽しさに気付き始めてくると、「早く遊びたい。」「やらなくては。」「いっぱい水を使うと袖がぬれるから腕まくりしよう。」という必要感に気付き始める。このような必要感をもつことが、自分から行動するきっかけとなる。

さらに、自分たちで楽しく遊びを進められるようになり、遊びの充実感や満足感を味わえるようになると、友達や教師のモデルとなる姿や言動によって、次の遊びへの見通しや片付けの必要感を感じるようになる。

生活に必要な習慣や態度に関して、幼児自身が必要感を感じとるには、以上のような発達との関連や遊びの充実との関連があることが分かった。しかし、必要感を感じとったからといってすぐに行動化できるのではない。片付け方など技能面が育っていないことで、どうしてもいか分ならず、必要感をもつが行動できないという姿が見られた。技能の獲得・自己コントロール・自覚・責任感などの育ちが伴っていることが、自ら行動することにつながっていくことが分かった。

2 生活に必要な習慣や態度が身に付くためには、どのような経験が大切か

- 生活の基盤となるような教師とのつながりや、安定した生活リズムなど、情緒が安定できることが基本的に必要である。
- 自分から自発的に活動に取り組み、遊びの楽しさや満足感、できた喜びなどを味わうことで、自分でしようという意欲につながる。
- 友達や教師の言葉や動きから刺激を受け、身支度の仕方や物の始末、片付け方などに気付いたり、知ったり、学んだりすることによって、技能の獲得、判断力、状況理解、生活の見通しなどがもてるようになる。

- 友達とのかかわりの中で、同じ動きを楽しんだり、一緒に遊ぶ楽しさを味わったりする経験によって、集団生活のきまりを理解し、皆と一緒にしようとする気持ちをもてるようになる。
- 遊びの楽しさや満足感を重ねる中で、身の回りの遊具や用具に愛着をもてるようになり大切に扱ったり、片付けたりするようになる。

3 環境の構成と援助の在り方

幼児が生活に必要な習慣や態度を身に付けるためには、

- 扱い方や片付け方が分かりやすい教材や環境
- 幼児の自覚や意欲を促すような行動の指示や援助
- 幼児自身の意欲や態度を認めたり励ましたりするなど、幼児の行動を支える援助
- やり方（技能）を一人一人に応じて分かりやすく知らせる援助と自分なりに取り組める時間の保障等が大切である。

また、幼児の発達や時期に応じて次のような配慮をしていく。

- 家庭での生活の仕方と集団での生活の違いに戸惑いの大きい幼児に対しては、幼児の気持ちに添って教師と一緒にしながら生活の仕方を知らせ、心地よい体験を積み重ねていく。
- 園生活に慣れ、遊びが楽しくなる時期には、自分なりの目的意識や生活の見通しをもって生活できるようにする。
- 友達の刺激を受けて育ち合う時期には、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにし、教師や友達の具体的なモデルを見たり友達と共通の目的意識がもてるような援助が大切である。

こうした環境の構成や援助をするにあたり、生活習慣のとらえや必要性の感じ方については、教師によって違いがあることもあるので、指導の方向性を園全体で共通理解することが大切である。

<今後の課題>

一人一人の幼児の年齢や発達に応じた援助や環境の在り方をさらに具体的に探っていきたい。また、幼児が気持ちよく生活するために必要な生活習慣とはどのようなものか、検討を重ね実践に生かしていきたい。

友達と喜びや悲しみを共感し、思いやりをもって共に生活する 楽しさを味わうようになるための環境の構成と援助の在り方

I 主題設定の理由

幼児期は、人間形成の基礎を培う重要な時期である。幼児期に様々な人とのかかわりを通して、信頼感、他者を尊重する気持ち、人を思いやる気持ちの芽生えを育てていくことは、「生きる力」の育成を目指した「幼児期からの心の教育」につながっていくものと考えられる。

しかし、現在の社会は、核家族化、少子化が進み幼児が人とかかわる機会が少なくなっている。また、自然の中で伸び伸びと遊べる環境が減っているため、直接体験をする機会や場がもちにくい状況にある。そこで、幼稚園の教育では、友達と楽しく遊ぶことや異年齢の幼児との交流、自然との触れ合い等の直接的・具体的な体験など、幼児期に体験すべき大切な学習の機会や場を用意することが重要である。

幼児は、友達とのかかわりの中で、楽しさや満足感、悔しさ、挫折、共感などの様々な感情を体験する。そして、自分の思いを表現したり、その思いを教師や友達に受け止められたりする中で、自分の存在、自分とは違う他の人の存在に気付くようになる。その経験を繰り返しながら思いやりの心が育ち、友達と共に生活する楽しさが味わえるようになっていくと考える。その過程において、とりわけ環境としての教師の存在は大きな意味をもつと考える。

そこで、この研究では幼児の内面の育ちをとらえ、その過程と要因を明らかにし、幼児一人一人の発達に応じた環境の構成と援助の在り方について探っていきたいと考えた。

II 研究方法

- 1 文献や先行資料を検討し「幼児が思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになる過程」を探る。
- 2 研究実践の基本方針として「幼児が思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになるための環境の構成と援助」を考える。
- 3 基本方針を基に保育を実践し、その結果から環境の構成と援助を明らかにする。

III 研究内容

1 主題のとらえ方

- (1) 幼児にとっての思いやりとは、友達の様子を見て、自分のことと同じように感じ、友達のためにそれを行為として表すことととらえた。

『思いやり』というと、泣いている友達に声をかけたり、頭をなでたりといった言動を思い浮かべがちである。しかし、そのような表面的な言動だけにとらわれずに、泣いている友達の傍らに悲しそうな表情でいるといった行為も含めて、思いやりととらえた。そして、その行為を表す基となる心情面の育ちが大切であると考えた。

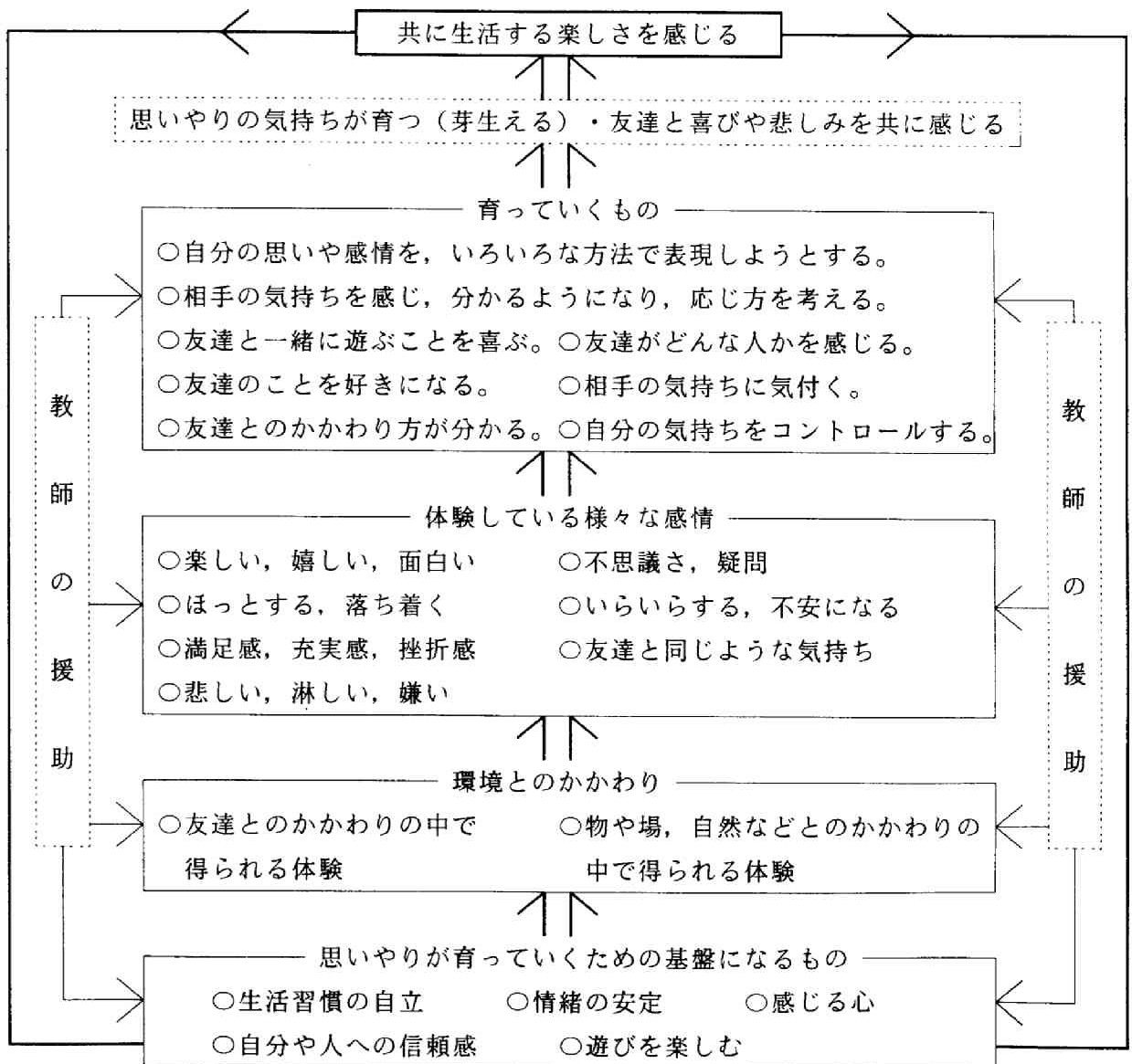
- (2) 共に生活する楽しさを味わうとは、“友達と一緒に遊ぶと楽しい”“友達っていいな”と感じ、友達の気持ちを受け入れたり、友達に受け入れられたりしながら生活することに楽しさや充実感を感じることととらえた。

幼児は友達と心を通わせることで、共に生活する楽しさを感じていく。そのためには、友達とのけんか、物の取り合い、仲間はずれなど様々な場面の中で葛藤体験を繰り返し経験していくことも、共に生活する楽しさを味わうようになるための過程として大切であると考える。

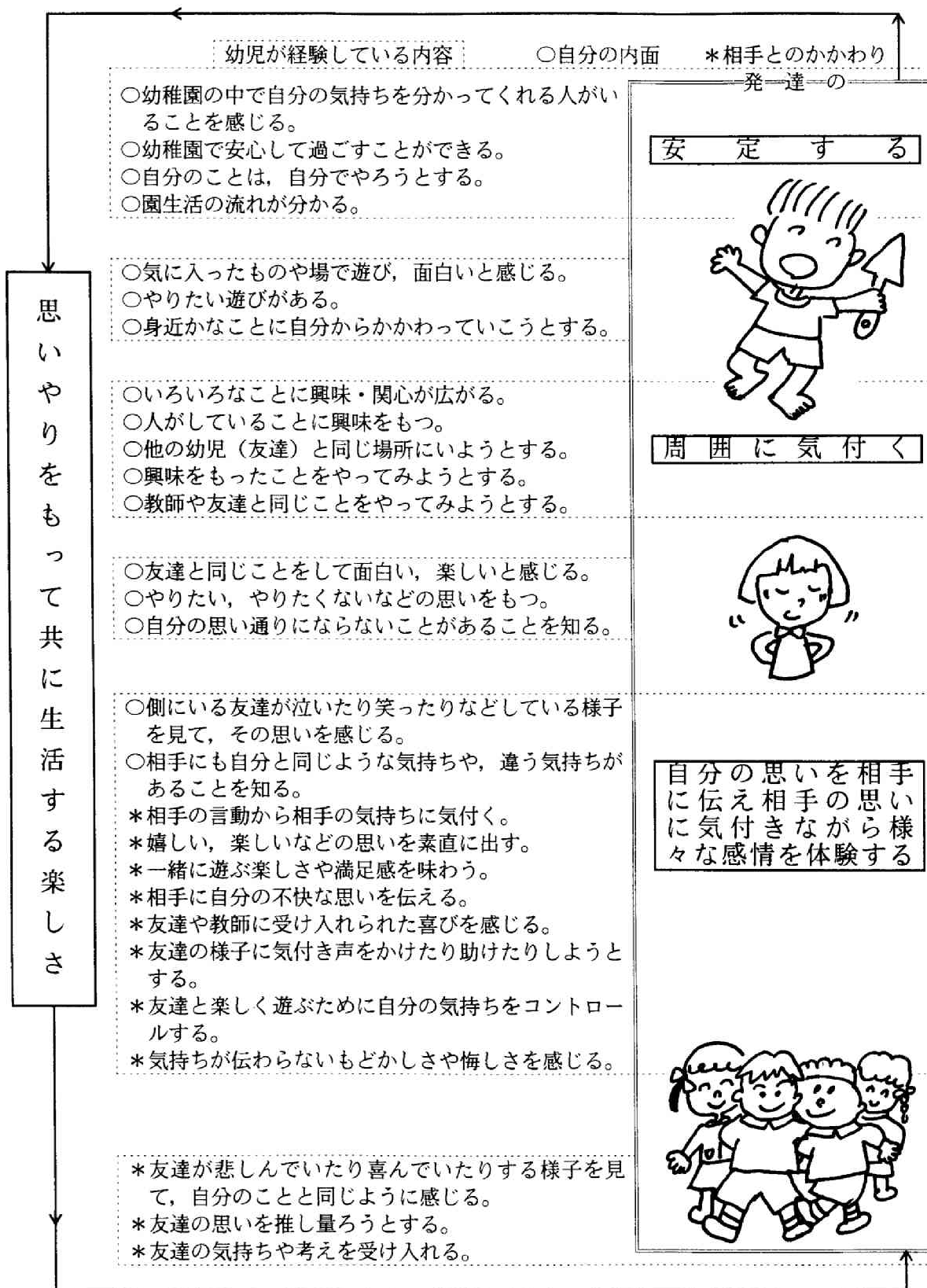
2 思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになる過程について

幼児が友達や教師などのかかわりを通して何を経験し、何が育っているのかを具体的な姿で検討した。その結果、下図のように幼児が友達と喜びや悲しみを共感し、思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになるための発達の道筋があることが分かった。

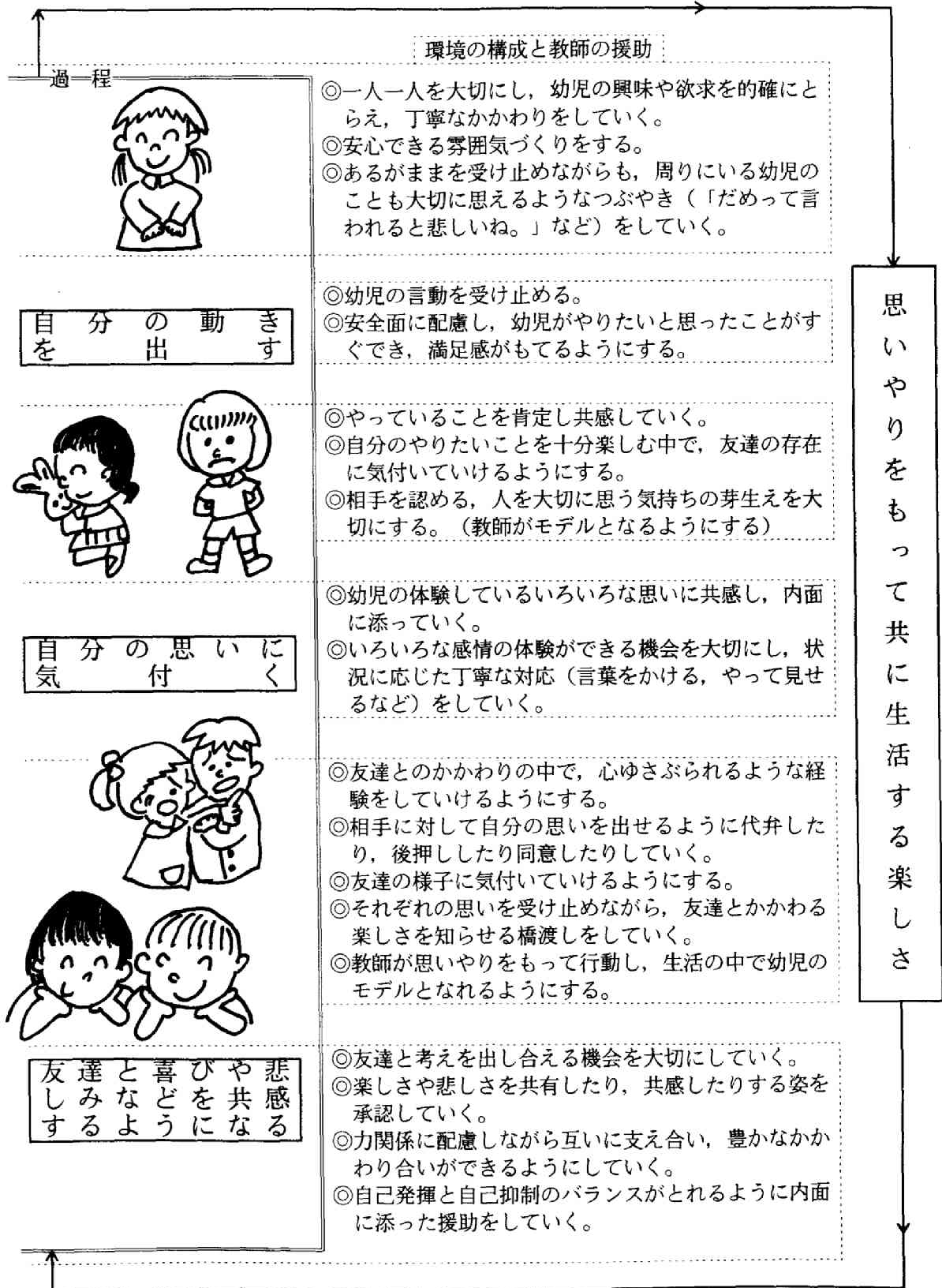
『思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになる過程』



幼児が思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようにするための
環境の構成と援助



・ 幼児の発達の過程に応じて環境の構成や援助の在り方について以下のように考えた。



3 実践事例

「幼児が思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになる過程」とそのための「環境の構成と援助の在り方」を明らかにするために、幼児の発達の過程に応じた環境と援助を基本方針として実践を行った。

実践事例の中から特に、発達の過程の特徴が見られる事例を以下に示す。

なお、事例の分析・考察の視点は、次の通りである。

- ・幼児は、共感や思いやりなどに関連するどのような経験をし、何が育っているのか。
- ・どのような環境の構成や援助が必要か。

事例1 思い通りにならないことや、相手の思いに気付くなどの感情を体験した事例

2年保育 4歳児 6月下旬

<教師の願い>

A児は、自分で遊びを探したり、友達のしていることに興味をもったりしているが、楽しさを見い出せないようだ。A児のやりたい遊びを見つけて楽しさを味わってほしい。その中で友達とのかかわりがもてるように援助したい。

C児は自分からよく遊び、自分の思いを出しているが、相手に対して強い口調で言う姿が見られる。C児の思いを受け止めながら相手の思いに気付いて、いろいろな方法で自分を表現できるようにしてほしい。

幼児と教師の言動	○幼児 ・教師	☁ 教師の思い・願い
<p>保育室でB児、C児、D児、E児の4人が、空き箱や空き容器などでカメラを作り、積み木や巧技台を使ってカメラの店を作って遊んでいた。</p>		
<p>○A児「入りたかったな。」とつぶやく。 ・A児の側に寄り添い「Aちゃんも、入りたいたんだよね。」と言う。</p>	<p>A児の気持ちを受け止めよう。 また、A児の気持ちを、言葉に出すことによってB児たちに伝えよう。</p>	
<p>○B児が教師の言葉を聞いて「あのね、“だめなの”って書いてあるの。」と言う。 ・「入りたいね。」とA児に向かって言う。</p>	<p>遊びに入りたいA児の気持ちを受け止めよう。</p>	
<p>○B児「一人で作って。」と言う。 ○C児、教師とA児の側を通りながら「向こうで作って。」とやや強い口調で言う。 ・「どうしても、駄目なのね。」とC児、A児の顔を見ながら言う。</p>	<p>C児たちの気持ちを受け止めよう。 A児にC児たちの気持ちを伝えよう。</p>	
<p>○D児「駄目なんだ、このお店は。」と言う。 ・「Cちゃんと、Bちゃんと、Dちゃんと、Eちゃんのお店なんだね。」と4人に向かって言う。</p>	<p>C児たち4人で遊んでいる楽しさを受け止めよう。</p>	

○C児，空き箱でカメラを作りながら，教師の話にうなづく。

安心して自分たちの思いを出してほしい。

○C児，みんなの方を向いて「そんなのできないよ，大きくなったらカメラ屋さんになるんだから。」と大きい声で言う。

○C児は，一緒に遊んでいるD児に「一緒にカメラ屋さんになるんだよね。」と顔を見合せながらニコッと笑う。

○D児が，C児の顔を見てニコリ笑いながうなづく。

○C児は，反対側にいたB児に向かって「Bちゃんも一緒に，カメラ屋さんになるんだよね。」とニコニコしながら言う。

・「お隣に作ろうか。」とA児を促す。

気持ちの転換を図って，A児が自分の遊びができるようにしよう。C児たちの近くで遊べるようにしてかかわりをもてるようにしよう。

○C児，教師の言葉を聞き，近寄って「駄目なの。もっと遠くで作って。」と言い，廊下を指さし「積み木で作って。」と言う。

・「Aちゃん，あっちで作ろう。」と言って，A児と廊下へ出て行く。

○C児たちは，A児と教師が廊下へ出て行く姿をしばらく目で追っている。

○C児は「いいよね。」とB児たちに確認するように言う。

A児のことが気になっているようだ。

○A児と教師が作り始めるとB児が「手伝ってあげる。」

と言い，積み木を運んでくる。しばらくすると，B児はC児たちのところへ戻る。

《考察》

- ・ C児たちは，園生活の中で安定し自分を出して遊んでいる。C児たちは，4人で遊ぶことに楽しさを感じていたため，A児を入れたくなかったのではないか。C児たちは4人で遊びたいという自分の思いをA児に伝える体験をした。
- ・ A児は，遊びに入れてもらえなかった残念な気持ちを教師が共感してくれたことで，C児たちの遊びに入れたくないという思いを受け入れ，自分の思い通りにならないことがあることを体験した。
- ・ A児は，C児たちの遊びに入りたい思いを表わし，教師に受け止められたことでC児たちに思いが伝わった。しかし，C児たちは，遊びに入れるのを断り，A児に困った状況を作り出している。その後，C児が「A児を断って良かった。」という気持ちをB児たちに確認したり，B児がA児を手伝ったりする姿がみられた。これは，C児たちが「A児を断って悪かったかな。」と思う気持ちをもったためと思われる。このように，一人一人の幼児が自分の思いを出し合いながら葛藤する中で，相手の気持ちに気付くようになり，思いやりの心が育っていくと考える。このような時期には教師は，幼児が自分の思いを出せるようにすることが大切である。そして，幼児の気持ちを受け止めながら，互いに相手の気持ちに気付くような雰囲気づくりをしていくことも大切である。

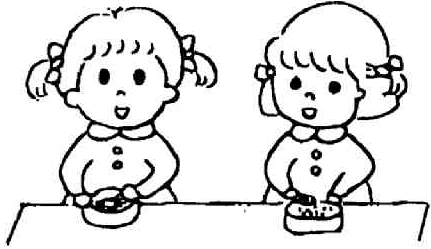
事例2 自分の思いを実現しながら友達と共感して遊んだ事例

2年保育4歳児 9月上旬

<教師の願い>

F児は、自分のやりたい遊びを見つけ一人で遊ぶことが多いが、友達への関心が薄いように思われる。そこで、自分の好きな遊びをしながら友達と触れ合う楽しさを味わってほしい。

H児は、自分の思いをしっかりとっていて、友達に対しても思いを通そうとする気持ちが強く、トラブルも多い。そこで、友達と遊ぶ中で、自分の思い通りにならないことがあることや相手にも思いがあることに気付いてほしい。

幼児と教師の言動	教師の思い・願い
<p>数人の幼児が戸外でテーブルを囲み、色水や石鹼水を作っている。H児はトロトロの石鹼水をスプーンですくって他の幼児にあげている。F児は石鹼をおろし器で削っている。</p>	
<p>○F児「先生、見て。HちゃんとFとで作ったの。」と石鹼を削る手を休め、容器を持って教師に見せる。</p>	
<p>・「ワー、トロトロだね。いいね。 FちゃんとHちゃんで作ったんだね。」</p>	<p>F児とH児のつながりを認め、二人で作った嬉しさに共感したい。</p>
<p>○F児「これね、ゼリー。」と嬉しそうに言い、また、石鹼を削り始める。</p>	
<p>○H児「欲しい人！サービスでえす。」と周りの幼児に向かって大きい声で言うと、G児が「いる！」とはっきり言う。</p>	
<p>○H児「はい。お待ちください。」と言いながら自分たちで作ったカップの中の泡をスプーンですくって持って行き、G児のカップに入れる。</p>	
<p>○F児「欲しい人！」と教師の顔を見ながら言う。 ・「はい！」と手を挙げる。</p>	<p>F児の気持ちに添い、実現させてやりたい。</p>
<p>○F児「はい、どうぞ。」とスプーンですくって教師の口元へ持っていく。</p>	
<p>○H児、その様子を見ていて「どお、この、あ・ま・さ」と教師の胸に指を突き出しながら言う。</p>	
<p>・「ヒャー！あ・ま・い」とE児と同じ口調で言う。</p>	<p>作った嬉しさを受け止め、満足感を味わわせたい。</p>
<p>○H児「もお。」と体をくねらせながら喜ぶ。</p>	
<p>○F児「ゼリーなんだよ。」</p>	
<p>○H児「ねえ。」とF児と顔を見合わせ、近くに あったカップを二つ取りながら「こっちに入れよう。」と言った後、「こっちに水を入れて来て。」とF児に向かって言うが、F児は、黙って石鹼を削り続ける。</p>	

- H児は、すぐに「水、入れて来るね。」とF児に言い、二つのカップに水を入れて来る。
- F児が「みんなにあげるんだ。」と言うとH児は、「違うよ。自分のなんだから。」とにこにこしながら言う。
- F児は、二つのカップに削った石鹼を入れ、H児は、それをスプーンでかきまぜる。

H児は、F児と二人で遊ぶことが楽しいと感じているのかな。

《考察》

- ・F児は、友達と同じようなことをして面白いと思い、H児と一緒に遊んでいるというつながりを感じている。また、環境として落ち着いて遊べる場や時間があったことでイメージが膨らみ、自分の思いに気付き言葉や態度に表すという体験をした。H児は、遊びや友達とのかわりを面白いと感じ、もっと続けたいという思いがあったことでF児の気持ちを察して動くという体験をした。このように、やりたい遊びがあり自分の思いを実現して楽しむ中で友達と一緒に遊んだり友達の思いに気付いたりしていく。その体験の積み重ねから、思いやりが育っていくと思われる。
- ・教師は、楽しかった遊びが繰り返し経験でき、自分の思いが実現できるような環境を用意するとともに幼児の嬉しさに共感したり、一緒に遊んでいる友達とのつながりを認めたりしていくことが大切である。

事例3 友達が思いを押し量り、思いに添ってくれたことで気分転換ができた事例

3年保育 5歳児 9月

I児がビニルテープを巻いて作ったモンスターボールを持っていると、J児が急に「Jちゃんのだよ。」と取る。I児は「何するんだよ。」と直ぐに取り返す。J児は自分の物だと強く言って泣き出すが、I児は自分が家で作ったと主張する。日頃からJ児と遊んでいるK児、L児たちが集まって来てI児の話の聞くと「いけないんだよ、人の作った物を取ったら…。」とJ児に言う。するとJ児は大声で泣き出し、友達が声をかけても泣き止まない。通りかかった教師が「Jちゃん、昨日同じの作ってたね。どうしたの。」など声をかけるがJ児は泣き続ける。

Jちゃんがこんな泣き方するなんて珍しい。昨日、JちゃんのモンスターボールをIちゃんが借りていたけれど、それを返してもらおうとしているのかな。Jちゃんは自分の思っていることがなかなかいえないでいるけど…今は、声をかけても答えられる状態じゃないようだから落ち着くまで様子を見よう。

・「Jちゃん、本当に悲しいんだね。」とつぶやく。

○K児、L児たちは、しばらくJ児の様子を見ていたがその場を離れる。

J児が何か言いたいことがあることをI児やK児たちに伝えたい。

○J児は10分ほどして泣き止むとハンカチで

顔を覆ったり、拭いたりしながらK児たちの遊んでいる遊戯室や保育室に行ったり来たりする。

・J児に「Jちゃん、困っていることあるんじゃない？」

「Jちゃんのモンスターボールどこにあるの。」

と声をかける。

事情がよくわからないから、J児の話をよく聞いてみよう。

○J児「分からない。大丈夫、もう困ってない。」と答える。

・「そう…困っていることがあるような気がするんだけど…」

とつぶやき、J児の様子を見てみるとM児が近寄ってくる。

○M児「ハンカチで顔を拭いて、あんなふうにしていたら自分で元気になったよ。」と教師に伝える。

・「Mちゃんも心配だったのね。」と言い、もう一度J

児に近寄り「Iちゃんが、家で作ったって言うしね。

よく分からないね。だったらJちゃんはモンスターボール作るの得意だし、もう一回作ったら。」とJ児に

向かって言う。

自分でどうにかするのかな。ちょっと様子を見て見よう。

○J児「うん。」とうなずき、すぐに作り始める。

○「僕も作ろう。」とM児はJ児の近くに行き「どうやるの？」

と聞く。

J児は「ん…」と言って黙ってM児が持ってきた新聞紙で作って見せる。

○J児とM児がモンスターボールを作っていると、遊戯室から

K児とL児が来てのぞき込み「また作ってるの、

元気になったね。」などと声をかける。

早く気分転換してほしい。

K児とL児は、やっぱりJ児のことが心配だったのだろう。

○次の日、I児は登園して来ると、

「僕ね、昨日帰ってからモンス

ターボールをJちゃんにあげたんだ。」

とニコニコしながら教師に伝える。

・「昨日、Jちゃんすごく悲しそうだったものね。」

と言う。

I児は、昨日はっきり自分の思いを伝えたものの、J児のことが気になっていたんだわ。

《考察》

- ・ J児は、I児の持っていたモンスターボールが自分の物だと主張したいが、I児の「自分は家に帰ってから作ったんだ。」という強い言葉を聞いて、相手の思いに気付いたものの納得できず、困って泣いてしまった。自分の思い通りにならない、納得できないなどの複雑な感情を体験しながら、自分の気持ちをコントロールしようとしている。泣き切るという方法で、その複雑な感情を自分の力で乗り越えるという経験ができた。
- ・ J児は、M児の優しい言葉かけや、K児、L児が遊戯室から来てくれたことを嬉しく感じて、友達に対する温かい気持ちを感じるという体験をしている。このような、友達が自分の存在を認めてくれているということを実感できる体験が大切である。
- ・ I児、K児、L児たちは、J児の強く泣きじゃくる姿から、J児の言葉にならないほど悲しいという思いを感じとることができた。「あんなに泣かせて悪かった。」と考え、J児の『悔しい、悲しい』思いを押し量り、泣き止んでから声をかける、側にいてあげるなどJ児の様子を見ながら対応して動いている。友達関係が深まってきているこの時期、友達が悲しんでいたり喜んでいたりする様子を見て、自分のことと同じように感じられることが、思いやりの心をもって共に生活する楽しさを味わうことにつながっていると考える。
- ・ 教師は、J児の言葉にならない思いを押し量り、自分の思いを表現できるような言葉をかけたり、様子を見てJ児が自分で気持ちをコントロールできるように時間を十分保障していたりするなど、内面に添った援助が必要である。また、I児、K児、L児たちが、J児の気持ちや様子に気付いていけるような援助や、それぞれの幼児の思いを受け止めて共感していく援助、そして友達と楽しさや悲しさを共有したり、共感したりする姿を承認していくことも大切である。



IV まとめと今後の課題

幼児が思いやりをもって共に生活する姿とはどのような姿なのか、どのような過程を経て幼児は思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになっていくのか、そのためには幼児の言動をどのように受け止め、教師の願いを重ね合わせてどのように援助していったら良いのか、ということに視点をおいて研究を進めてきた。その中で次のような環境の構成や教師の援助が大切であることが分かった。

○自分の思いを安心して出せる雰囲気や学級の中につくっていく。

入園当初の不安定な時期に、教師が幼児の不安な気持ちを受け止めたり、一人一人に丁寧にかかわったりすることで、幼児は自分のことを分かってくれる教師の温かさを感じる。そして、自分が受け止められている充実感を味わい、自分の思いを安心して出せるようになっていく。このことは、思いやりをもって共に生活する楽しさを味わうようになっていくための基盤となる大切なことである。

幼児は自分を出すことによって、友達とのぶつかり合いを体験する。その中で、悔しさ、挫折、葛藤などの様々な感情を体験しながら、自分を知り、友達の気持ちに気付き、思いやりの気持ちが育っていくことになると考える。

○幼児同士の気持ちの伝え合いができるようにする。

幼児は表現がたたくなく、なかなか自分の思いを言葉で相手に伝えることができない。友達と楽しさを共感したり、友達とのつながりを感じたりしていくためには、幼児同士の気持ちが通じ合うことが大切である。そこで、教師は幼児の気持ちを代弁したり、伝えられるように後押しをしたり、友達の思いを受け止められるように援助したりすることが重要である。

○幼児の気持ちに共感したり、友達とのつながりを認めたりする。

幼児の遊びの中で、その時々教師が幼児の気持ちに共感していくことで、その経験がより確かなものとして幼児の心に残るものと思われる。そのことは、思いやりの気持ちを育て共に生活する楽しさにつながると考える。また、友達と楽しんだ遊びや学級のみんなで楽しんだ経験をやりたい時に繰り返し楽しむことで、友達と共感したり、つながりが深まったりしていくと考える。

○教師自身の周りの環境へのかかわり方が、幼児のモデルとなるよう行動する。

幼児は教師の生活の様子や他の幼児へのかかわりの様子などをモデルにしていく。そこで、教師が心から喜んだり心配したりする姿など、思いやりの言動を示していくことが大切である。一人の幼児に対応している時でも、その様子を見ている周りの幼児がどのように感じ、受け止めているかについても十分配慮することが必要である。

この研究を通して、環境としての教師の存在の重要性を改めて感じさせられた。そして、今後は、この研究の成果を実践に生かしていきたいと思う。